

クレアと 'The Parish' における宗教

鈴木蓮一

(1)

クレアが書き残した膨大な数量の詩作品のなかで風刺詩と呼ばれたり、そう考えられている作品は初期の 'The Parish' と後期の 'Don Juan' である。'The Parish' が1986年に Penguin Classics の一冊として出版されたとき、編者 E. Robinson は *The Parish A Satire* という標題にした。この詩が書かれた時期は主に1820年から1824年であると推測される。1968年にその時点までの 'the best version'¹としてこの詩を *John Clare Selected Poems* に所収した E. Feinstein はこの詩の創作時期を1820年から1824年だと考えたし、M. Miner は主に1822年から1823年だと言っている。²確かにクレアは1822年11月5日付けの Hessey 宛の書簡の中で「同様に私は The Parish という風刺詩も書き終えつつあります」³と記述し、さらに同じく Hessey 宛の1823年1月4日付けの書簡では「私はわが 'Parish a Satire' をちょうど書き終えたところです」⁴と記述している。だが1826年5月12日になっても Taylor 宛の書簡のなかで「『教区』という詩、それは私見では今までに書いた詩の中で最良のものであります。そしてできれば変更し、より良いものにすることに多少骨を折るつもりです」⁵と言っているように1824年以降、いや1826年以降でさえも機会を見つけてはこの詩を推敲していたことは想像に難くない。従って Oxford English Texts としてのこの詩も「完全には仕上げられていない形跡」(signs of not having been completely finished)⁶をもっている。Penguin 版の序文で Robinson は「『教区』は宗教を論じることに於いて最も力強く表現されているけれども、もしこの詩がクレア自身の精神における不安感や緊張感をもっと十分反映しているならば、それはさらに力強いものであろう」⁷と述べている。クレアが1820年には処女詩集 *Poems Descriptive of Rural Life and Scenery* を世に問い、翌1821年にはその第4版と *The Village Minstrel and Other Poems* を上梓することによって、「農民詩人」(peasant poet) という特異な存在としてロンドンで一躍その名を知られるようになったという事実を顧みれば、この風刺詩の創作目的と、創作へと駆り立てた「道徳的憤怒の感情」(sense of moral outrage)⁸がクレアに不安感や緊張感をもたらしていたことは言をまたない。まして当時の詩の読者のほとんどがごく限られた上流階級であり、「彼にとっての上流階級の聴衆」(his polite audience)⁹にアピールし、彼らに詩集を購読してもらうことによって詩人としての名声を維持し、生計を立てていくことが重要だと意識していたクレアであってみればなおさらのことである。そのうえクレアは既に1814年にはヘルプストンの会衆派教会 (Independent Chapel) に通ったり、ユニテリアン派、クエーカー教徒、原始メソジスト派 (ランター) といった非国教会諸派に関心を抱き、1819年にはウェスレー・メソジスト派に傾倒し、その正会員になるなどして、国教会派の福音主義者である彼の庇護者らと対立する立場をとった経歴をもっている。またこの詩をほぼ書き終えていた1824年3月にはランターとの交流を求めることを決心し、同年4月20日にはこの派に入会した。それはウェスレー・メソジスト派が非民主的であり、ナポレオン戦争に続く田舎でのひどい困窮に苦しんでいた労働者階層を無視したのに反し、ランターが彼らの心に訴えていたからである。宗派についてのこうしたクレアの体験や反応が *The Parish A Satire* の重要な構成要素であ

る宗教についての風刺に反映されていることには疑問の余地はない。本稿ではクレアがこの未完の風刺詩の中でとくに宗教について何を書こうとしたのか、その目的は何であったのかを、またクレアの立場あるいは見地はどこにあったのかを書簡や散文作品を援用し、1820年から1824年にかけての彼の精神状態を考察しながら検証したい。よってコミュニティとそのなかにおける人間存在の有様に関しての彼の現実認識と理念を明確にすることは彼の社会観についてのわれわれのより深い理解を可能にしてくれるものと筆者は信じる。

(2)

この詩の冒頭で、その主題、それを歌う詩人の意気込み、そしてこの詩の精髓となるべき〈真実〉について語る。

The Parish hind oppressions humble slave
 Whose only hopes of freedom is the grave
 The cant miscalled religion in the saint
 & Justice mockd while listning wants complaint
 The parish laws & parish queens & kings
 Prides lowest classes of pretending things
 The meanest dregs of tyranny & crime
 I fearless sing let truth attend the ryhme
 Tho now adays truth grows a vile offence
 & courage tells it at his own expence (1-10)¹⁰

この詩の主題は①圧制の犠牲者となり、死ぬまで自由のない奴隷のような生活を送らざるをえない教区の小屋住農、②貧窮者の苦情を聞くけれども真似ごとにすぎない「正義」、③救貧法、④教区の権力者達、即高慢に満ち、うわべを飾って生活する低俗な輩、⑤圧制や犯罪を行うきわめて卑劣なクズのような連中、⑥熱狂的な信徒達において宗教だと誤称されている、信仰深さを装った言葉使い、即‘cant’であるという。この場合の‘cant’は‘*esp.* Affected or unreal use of religious or pietistic phraseology; language (or action) implying the pretended assumption of goodness or piety’ (OED 6.b) の意である。主題⑥は挙げられた6個のテーマのひとつにすぎないが、実際この詩を読んでいくとこの宗教上のテーマに関連する詩行はこの詩全体の大半を占めている。引用3行目の‘the saint’については Feinstein が「saint という語は非国教会派の狂信的な会員に言及するためにこの当時普通に用いられた」と説明している。¹¹だがここでは「敬虔であるとうわべだけの信仰告白をする人」という意味にとり、国教会派の信徒をも含めたキリスト教徒全般を指すものと解釈すべきであろう。‘The cant miscalled religion in the saint’における‘cant’は、この詩の副題がもともと‘The Progress of Cant’であったことから明らかなように、この詩における最重要のキーワードの一つである。Robinson はこの副題に注意を集中することの意義を次のように説く。

Rather, the poem (*The Parish*) has more to do with Clare's *perception* of his lot. In fact in one manuscript, MS 30, the poem is given the subtitle, *The Progress of Cant*, and the poem is largely taken up with the exposure of this vice in different sectors of the village

population. It is perhaps by concentrating on this subtitle that we may arrive at a better understanding of Clare's frame of mind.¹²

また Thornton は、クレアの道徳的激怒は政治や経済ではなく、農業家と農業労働者との階級的ギャップでもなく cant に向けられていると言い、¹³ Robinson の説に同調している。cant への人心の傾斜は単に教区の宗教的領域にとどまらず、「村の住民の様々な分野における悪」として観察された現象でもある。Robinson の説に従い、cant に十分注意を払いながら、宗教に関係する人々についての詩行を読んでいきたい。

まず Miner が「典型的なランター」(a typical Ranter)¹⁴ であると評した人物 Ralph の描写を見てみよう。

Old Ralph the veriest rake the town possed
Felt sins prick deep & all his crimes confest
Groand oer confessions to his ranting priest
& prayd & sang & felt his soul released (579-82)

村ではまさに放蕩者であった Ralph は罪の意識に苛まれる。彼が入会したランターの熱狂的に説教する牧師に向かって、煩悶しながら罪の告白をする。懺悔の後、彼は神に祈り、賛美歌を歌い、自らの魂が救済され、罪の汚れから清められたと感じる。

The new births struggles made him wonderous wan
& feebly prayd at first the baby man
Twixt doubts & fears yet viewd the cured complaint
& scarce percieved the devil from the saint
But soon the 'outward man' grown godly mad
Felt the good spirit triumph oer the bad
& cants dull prayers too lame to visit heaven
Lookd oer past sins & fancied all forgiven (583-90)

Ralph は信仰に目覚め、新生を目指してひどく青ざめた表情になるほど苦悶する。回心した彼は、初めは半ば疑念を抱き半ば心配しながら、微かな声で祈りを捧げていたけれども、心の病は癒されたと見なしたし、悪魔と聖人を識別することもほとんどできなかった。こうした状態の後間もなく、信仰することにのぼせ上がった「外なる人」は善き魂が悪しき魂を克服していると、また「善あるいは信仰深さを装っていることを意味する言葉」から成る、宗派特有の言い回しや退屈な祈りが天国に入るにはあまりに不十分なものだと感じた。さらに自分の過去の罪にざっと目を通し、罪は赦されたと思う。

He then whind lectures in a happier strain
& coaxd poor sinners to be born again
Shund old companions once beloved so well
As condemnd transports on the way to hell
& prayd & sang from sin & pain releasd

& smoothd his hair & fashiond for a priest (591-6)

それから彼は弱々しく苦しそうに小声で説教するが、その口調は今までより愉しそうである。彼は罪びとに回心するよう優しく説くが、かつてはとても愛していた仲間達を地獄に墮ちる呪われた流刑囚として避けた。彼は清浄無垢な牧師になりきろうと髪をなでつけ、それに似つかわしい服装を身につける。彼の説教を聴いて感涙することによって神の教えに背く者もいれば、徹底的に熱狂的な信徒になる者もいた。彼らは福音書を読み、聖パウロを勉強したが、彼の説く善き教義が最高のものであると思った。彼らは自分達の今までの宗教が「目隠し遊び」であり、星明りも無い真っ暗な夜道を旅するようなものにすぎないと気がつく。Ralph が彼らの歩みを明るい場所へと戻した結果はこうである。

& thus as priest he exercised his wits
Forcd men to prayers & women into fits
& heard & cured each difficult complaint
& midst his flock seemd little less then saint (605-8)

彼は牧師としての才能を発揮し、男達を祈りへ、女達を興奮状態へと無理矢理向かわせ、聴罪をし、彼らの難しい心の病を癒してやる。そのため、彼は信徒達の間ではほとんど聖人も同然であると見なされる。しかし彼は悪魔の誘惑に負け、ひとりの美しい女信徒に恋をし、墮落する。彼は神に祈ることよりも人の心をたぶらかす美しい女に喜びを見いだす。だが罪の意識で悲しい思いをしながらも彼は何事もなかったかのように牧師の勤めを続け、己の心の状態を全盲の罪びとほどゆめしいとは考えない。

Tho sinfull love had overpowerd his skill
With other sins he kept unspotted still (625-6)

人を罪の誘惑から救うことが彼の牧師としての任務であるにもかかわらず、結局彼自身肉体の欲望に屈服し、牧師としての彼の能力はその欲望によって無力にされ、罪に汚れる。だが他の罪によっては汚されていない状態であり続けた。

He drank nor swore & when a lye was told
Twas just gains trifle when he bought & sold
When bretheren met he woud his joys express (627-9)

彼は酒を飲み、かつ神にかけて誓うことはなかった。彼が詐欺をはたらくのは彼が売買するときのほんのわずかの儲け金のためである。宗教行為と己の利得を計る事は全く矛盾するものであり、詐欺行為によって彼も self-interest という時代の悪弊に染まっていることが示される。

Ralph に見られるように、宗教行為と商売行為即 religion と business という相反するものの同居をクレアは攻撃している。business を優先し、利得のため嘘をついて貧者から金品を巻き上げるやり方をクレアは「略奪」(plunder) とみなす。Ralph は非国教徒として登場する Save All や drunken cobbler と同じく田舎の中産階級へと上昇する。Ralph のモデルと目されている人物は、クレアの詩集を出版することを引き受けておきながら、結局出版せずに、経費だけは請求してきた、隣町の

Market Deeping に住む J. B. Henson という者であるが、クレアは彼のことを「詐欺をする商人であり、かつ宗教の面では偽善者」(a cheating businessman and a religious hypocrite) であると痛感した。¹⁵ 彼が攻撃している対象は、「耐えるべき重荷を持たないが、重荷を担う途方もなく大きな力を持ち」、「他の者を援助すべき」であるが、「無為に傍観している」¹⁶ 貴族ではなく、成り上がり者の中産階級である。彼らの偽善的言葉使い、詐欺行為、気どり、傲慢がクレアの憎悪の標的であった。この点に関して J. Mckusick は

In his satirical poem *The Parish*, Clare mocks the social affectations of these new upwardly-mobile landowners, who have abandoned traditional rural culture and now seek to imitate the manners and fashions of their sophisticated middle-class urban counterpart.¹⁷

と示唆に富む指摘をしている。「成り上がり者達」(upstarts 225) については Feinstein が「労働者階級がより貧乏になるにつれて、より富裕になり、その際に村社会における生まれながらもっている役割を見失った人々にたいして、クレアの皮肉が最も強く感じられる」と分析している。¹⁸

さて、女色に溺れ、墮落した Ralph の末路を詩人はこう描く。

Till the compleation of his serpent sin
Urgd by the devil sunk him to the chin
Eve tho beguild forbidden fruit to haste
Had lovd an adam ere she loved the priest (633-6)

悪魔に唆された彼は罪で深く汚れてしまう。相手の女も禁断の木の実を味わうよう誘惑されるが、Ralph との情事に陥る以前既に他の男と結婚していた。¹⁹ なお 'haste' (635) は Feinstein のテキスト及び Penguin 版では 'taste' となっている。筆者は解釈上 'taste' を採った。

& ere disgrace had ripend into light
Ralph had no power to wed her & be right
His fate was evident it came at last
His sheep was judge & shepherd ralph was cast
Then drink & rackett joind their former friends
& new born saint in the old sinner ends (637-42)

隠し被ってきた二人の情事が人目につき始めるまえに彼女と結婚し、正しい生活に戻る力は Ralph にはなかった。彼は信徒達からついに見捨てられ、昔の仲間と酒を飲み、放蕩生活を始める。放蕩者が懺悔・祈り・賛美歌を通して回心し、他人の魂を罪から救う牧師となるが、肉体の欲望に負け、不義を犯し、元の放蕩者に逆戻りというのが彼の生き様である。彼についてクレアが最も非難している部分は何であろうか。Ralph がランターであることは述べたが、ランターと国教会派を描写する個所を見てみよう。

The Ranter priests that take the street to teach
Swears god builds churches where so ere they preach
While on the other hand protestant people

Will have no church but such as wears a steeple (535-8)

ランターの牧師は巡回説教師であり、街頭で説教するところはどこであっても神が教会を建てているのだと主張する。この主張のなかに彼らの信仰における情熱の激しさと独善的な要素をクリアは感じ取った。ランターはその情熱の激しさ故に彼に感銘を与えたのであるが、熱狂的ともいえる過度の情熱故に非難的にもなっている。Ralph は妄想に満ちた熱狂的信仰心によって間もなく肉体の欲望を克服し、牧師となる。内面には「善き魂」が充溢したことを表す 'But soon the 'outward man' grown godly mad / Felt the good spirit triumph oer the bad' (587-8) における 'soon' という副詞は、ランターの魂の早熟ぶりと情熱の過度を巧みに当て擦る語である。

(3)

次に非国教徒の Save All の描写に移ろう。「幸運の女神」の愛顧に恵まれ、富裕階級に成り上がった彼はこう描かれる。

Famous for riches & by knavery prized
 & famed for meanness & by work despised
 Who trys to buy a good name & decieve
 With fair pretentions that but few believe
 Who seldom swears & that but now & then
 A smuggled oath when vexd by better men
 That beard hypocrisy with honest grace
 & tears the mask from cants decieving face
 Yet in religion he is made elect
 & buys with wine the favours of the sect (425-34)

彼は篤信家ぶる金満家として有名であり、詐欺師達からは尊敬されている。また稟裔家としても有名であり、労働者達からは軽蔑されている。令名を金で買い、口先だけのもっともらしい見せかけで人を欺こうとするし、神に誓いをたてることは滅多にない。「率直という美德」によって偽善をあからさまに非難し、詐欺者から偽善の仮面をはぎ取る有徳の士にせかされるときだけこそそと誓う。世俗的宗教において彼は選ばれた者であり、酒を振舞って仲間の信徒達の支持を得ようとする。Save All という名の示すとおり、あさましさが彼の本質である。この本質に詐欺・虚飾・偽善・仮面がその属性として挙げられる。彼もまた物欲にとらわれた似非宗教者である。

Making each spouter welcome when he comes
 & turning beggars from their fallen crumbs
 Pleading up charity in whining tones
 & driving dogs at dinner from the bones (435-8)

説教者はおてなすが物乞いには落ちたパン屑さえ与えない。他人には愚痴っぽい調子で慈善行為をするよう盛んに主張するが、犬に骨も与えないほどのけちである。慈善を説くのは裏腹の行為をする偽善者ぶりは、「隣人としての親切な行いをせよとくどくど説教するが／日照り続きのときは

おのれの井戸に錠を掛けてしまう」(On neighbourly good will he often dwells / & in dry times locks up his very wells 443-4) というふうである。この二行は Save All のあさましさと宗教的偽善者ぶりを描いて見事である。最後に 'With the elect most saintish or most civil / & with the rest a cunning knave or devil' (449-50) という詩行で、Save All が教会では選ばれた者にたいしてきわめて熱狂的に信仰家ぶるかあるいは礼儀正しい態度をとるが、その他の者達にたいしてはざる賢い態度をとる悪党かあるいは悪魔であると攻撃される。

次にもう一人の非国教徒 drunken cobbler を見てみよう。

The dru[n]ken cobbler leaves his wicked life
 Hastes to save others & neglects his wife
 To mend mens souls he thinks himself designd
 & leaves his shoes to the uncalld & blind
 He then like old songs runs the scriptures oer
 & makes discoverys never known before
 Makes darkest points as plain as A B C
 & wonders why his hearers will not see
 Spouts facts on facts to prove that dark is light
 & all are blind till he restore their sight
 & swears the old church which he cast away
 As full of errors & as blind as they (499-510)

「酔っぱらいの靴直し」は今までの罪深い、不信心な生活をやめ、他人の魂を救うのに性急である。しかも自分の妻を無視してまでもこういう状態なのである。自分が他人の魂を矯正すべく神によって意図されていると思ひ込み、靴直しの仕事をそれが天与の職ではなく、盲目である人にまかせている。これは自分の妻を等閑視することと同じく、彼が自分の身近な最も大切なもの即家族や義務をおろそかにして、他人の魂を救済するという大それたことをすることが、宗教的観点から見て本末転倒であるという意味であろう。聖書を古謡のようにざっと読みとばし、それまで知られなかったことを発見する。聖書の極めて難解な箇所を極めて初歩的で平易な個所だと誤解し、何故自分の説教が聴く者に分かってもらえないのかと首を傾げる。暗闇が光だということ、自分が視力を回復してやるまでは信徒は皆盲目であるということを証明するために事実を次から次へと弁じたてる。さらに彼が見捨てた「古い教会」即国教会は彼の聴衆と同様誤謬が多く、盲目であると誓っている。

& offers prayers no doubt as prayers are cheap
 For chosen shepherds to his worships sheep
 Thinking the while if such the will of fate
 Self might become a hopeful candidate
 & doubtless longs shoud reformation call
 To leave his own & take his neighbours stall
 Part urgd as scripture more as self consiet
 To suit his ends each passage he repeats
 & in as various ways each fact he weaves

As gossips riddles upon winter eves
 Now storming threats now pleading comforts mild
 In puleing whine soft as a sucking child
 The[y] cant & rave damnations threats by fits
 Till some old farmer looses half his wits (511-24)

確かに、閣下の羊のための選ばれた「羊飼」即牧師は自分にとって祈りがほとんど金のかからない楽な仕事であるがゆえに祈りを捧げるのである。「運命」がそうした事態を望むのであれば利己主義者が牧師になることが多いだろうという。それは他者の利益より自己の利益を優先することが宗教の世界において行われることである。その結果、宗教上の改革が自分に要求するなら、自分より上位の隣の聖職者席を奪いとろうとする。‘stall’はグロッサリーによると‘shed, temporary hut’であり、OEDには‘the booth or shed to shelter a cobbler at his work’ (6.b) とあるが、‘the office, status, dignity, or emolument connected with the occupancy of a (cathedral) stall; a conony or the like’ (OED 5.a) という意味もあるので、‘to leave his own & take his neighbours stall’ という表現は聖務日課・地位・威厳・俸給において自分のものより高いものへと上昇したいという欲望を意味するのではないか。また‘self’ (514) という語もキーワードである。宗教の本質である他人の魂の救済を実現するためには、自己の世俗的な利益を計ることを放棄しなければならない。宗教と利己主義は矛盾するものであり、宗教行為においてselfはselflessに向かわなくてはならない。「靴直し」は自分の目的に適うようにと、聖書の一節一節を聖書としてより自己の自惚れの表れとして繰り返し朗読する。冬の夜おしゃべり女が謎めいたことを物語るように、彼はいろんなやり方で事実を一つ一つ丹念にでっち上げていく。時には脅しの言葉を激しく浴びせたり、時には優しい慰めの言葉をかけてやるためだとかほそい声で弁解する。「靴直し」のような連中は信心深さを装った言葉を使い、聴く者にたいし発作的に大声で、墮地獄の罪を犯していると言って脅すので、半ば気を失う老人もいる。

Looks back on former sins tho loath to doubt
 Groans oer a prayer & thinks himself devout
 Then learnings lookd on as an idle jest
 & the old cobbler preaches far the best
 Who smooths with honied hopes the deep dyd sinner
 & earns reward—a lodging & a dinner (525-30)

過去に罪があったとは思いたくはないが、反省はし、苦悶しながら祈りを唱える。そして自らを敬虔であると思い、学識を無駄な笑い草と見なす。この「靴直し」ははるかに最善の説教者であり、罪に深く染まった人を甘い希望の言葉で慰める。その報酬として宿泊と食事に与る、否「稼ぐ」のである。このような「靴直し」の特徴は、他人の魂を救済する宗教的能力がにわかに自分に備わったという錯覚をいだかせる「自惚れ」、そこから生じる、国教会を誹謗し宗教改革を望む熱狂ぶり、それに物質的利得をめざす利己主義である。

(4)

既成の国教会に飽きたらず、その慣習・制度を捨て去り、新しい教会を求めて宗教改革の運動をする人々、とりわけランターに代表される過激な信仰心をもつ人々については次のような一節がある。

Some with reform religions shade pursue
 & vote the old church wrong to join the new
 Casting away their former cold neglects
 Paying religions once a week respects
 They turn from regular old forms as bad
 To pious maniacs regular[1]y mad
 A chosen race so their consciet woud teach
 Whom cant inspired to rave & not to preach
 A set of upstarts late from darkness sprung
 With this new light like mushrooms out of dung
 Tho blind as owls i' th' sun they livd before
 Consiet inspired & they are blind no more (487-98)

彼らの中には、以前のように教会を冷淡に無視することをやめ、週一度教会に通うのであるが、そこでの正規の作法や形式を間違っていると考え、心がそれらから離れて「完全にのぼせ上がった敬虔な狂人」へと向かう者もいる。彼らは「自惚れ」ゆえに自らを「選ばれた集団」だと思い込み、また偽善ゆえに説教するというよりわめきちらすのである。

ここでクレアと非国教徒とくにランターの関係を概観しておくことは上述した Ralph を初めとする非国教徒達の人物描写のよりよい理解に役立つであろう。Tibble によればクレアは1814年既にランター等の非国教徒に興味を抱き、彼らと交際していた。だが1821年には「私は国教会に敬意を払っています」(I reverence Anglican)と言明した。さらに急進的政治に関係があり、その初期には「極端な共産社会主義者」(extreme communitarians)であると考えられたランターや他の非国教会派を否定している。

In matters of religion I never was and I doubt never shall be so good as I ought to be—tho I am at heart a protestant perhaps like many more I have been to church [more] often than* I have been seriously inclined to recieve benefit or put its wholsome and reasonable admonitions to practice—still I reverence the church and do from my soul as much as anyone curse the hand that's lifted to undermine its constitution—I never did like the runnings and racings after novelty in any thing, keeping in mind the proverb 'When the old ones gone there seldom comes a better.' The 'free will' of ranters, 'new light' of methodists, and 'Election Lottery' of Calvanism I always heard with disgust and considered their enthusiastic ravings little more intelligable or sensible than* the belowings of Bedlam. In politics I never dabbled to understand them thoroughly²⁰ (* than)

クレアは発心の機縁となるような無常感を抱いてはいたが、とくに信仰心の深い者ではなかったし、将来もそうであろうと自認している。国教会の制度の根幹に危害を加えるような者を誰もが罵

のと同じ程度には彼も罵ると言う。クレアが国教会にたいして抱いている敬意はその程度のものであると言う。そして何事においても新奇さを求めて競走することは好まないといい、また宗教における中庸を尊重する態度を次のように表明している。

& it is with religion as it is with every thing else its extreames are dangerous & its medium is best—enthusiasm begins in extravagance degenerates into cant & hides at last into hypocrisy²¹

クレアはランターの‘free will’、ウェスレー・メソジスト派の‘new light’、カルビン主義の‘Election Lottery’というような用語を聞くといつも不快感を覚え、彼らの説教は精神病院から聞こえてくる狂人達のわめき声のように何を言っているのか意味不明であるという。

当時の労働者階級は一般的に言って国教会にはあまり親しみをもっていなかった。また中流階級の信徒が多いウェスレー・メソジスト派のような非国教会派についても事情は同じであった。宗教についてクレアは次のように言及している。

we heard the bells chime but the fields was our church and we seemd to feel a religious poetry in our haunts on the sabbath while some old shepherd sat on a mole hill reading aloud some favorite chapter from an old fragment of a Bible which he carried in his pocket for the day²²

「われわれ」とは農業労働者のことである。鐘が鳴っても教会へ行かない彼らにとって野辺が教会である。既成の制度としての国教会を疎んじてはいても、聖書を携え、自然の中で朗読してはこれに親しむ羊飼いやいた。クレアは自分のことについて、「わたしの父は国教会において育ち、わたしはそれ（国教会）からわたし自身を引き離す理由が見つかりませんでした」²³と云うけれども、自らの国教徒としての日頃の態度についてこう記している。

thus I went on writing my thoughts down and correcting them at leisure spending my sundays in the woods or heaths to be alone for the purpose and I got a bad name among the weekly church goers forsaking the ‘church going bell’ and seeking the religion of the fields tho I did it for no dislike to church for I felt uncomfortable very often but my heart burnt over the pleasures of solitude and the restless revels of rhyme that was eternaly sapping my memorys like the summer sun over the tinkling brook ...²⁴

クレアが教会に通わなかったのは教会を嫌悪していたという理由からではなく、「静寂」の中で《自然》を観照したり、詩想に耽けることを楽しめたかったからである。教会で祈ることを‘uncomfortable’と感じることがよくあり、彼も農業労働者の一般的気質に違わず、「野の宗教」を求めていた。この点について Miner は「同時代の大半の農業労働者と同様、ジョン・クレアは英国国教会への何ら特別の愛着を抱くことなく大人になったように思われる」と指摘している。²⁵ところで‘uncomfortable’という語の響きは‘unconformable’という語を連想させ、国教会の慣行・しきたりには従わないということを暗示しているようだ。国教会に対する反発から彼が非国教会派、特にウェスレー・メソジスト派とランターに向かっていったのは自然な成行きであった。

自伝的著作には、ウェスレー・メソジスト派についての次のような回想がある。

after this I turned a methodist but I found the lower orders of this persuasion with whom I associated so selfish narrow minded and ignor[ant] of real religion that I soon left them [and] sank into m[ethodist] sects agen they believed every bad [opi]nion [except abou]t themself[es] [Henson] the preacher then of [Market Deeping]²⁶

恐らく①国教会のなかに紳士階級を気取る俗物根性、いわゆる 'social snobbery' を感じとって失望したこと、②国教会が貧民の圧迫に加担していることに憤慨したこと、③信者の階級をその魂の状態ほどには重要ではないと見なす傾向によって非国教会派は労働者階級の貧民を魅了していた、というような理由でクレアはウェスレー・メソジスト派の会員になったのであろう。²⁷ この派とクレアの関係の最初の証拠は1819年12月20日付けの Drury から Taylor 宛の書簡から判断すると「1819年末までにはクレアは脱会することができる程十分長くウェスレー・メソジスト派の正会員であった」ということはほぼ確実である。²⁸ この宗派の低俗な連中が「ひどく利己主義的かつ狭量であり、真の宗教についても無知で」とあると分かった時彼らとは縁を切ったが、再び交わるというふうであった。クレア自身宗教に関する信念をもってはいたけれども、1819年末までは家庭の経済的苦境・詩人としての成功とそれに伴う村人から受けた疎外感・村落共同体において横行していた偽善行為によって苦汁を嘗めさせられた経験といったことが彼をしてこの宗派の入脱会を繰り返させたのではあるまいか。1820年に最初の詩集 *Poems Descriptive of Rural Life and Scenery* が出版された頃彼は脱会しているが、その理由は①自分の経歴を良くすること、②彼がこの派の中流階級意識・偏見を嫌ったこと、③この派が労働者階級の人々をますます信じなくなり、彼らが政治改革をしつこく迫るのではないかと疑っていたこと等が推測されている。²⁹ 脱会へと最も強く衝き動かしたのは、非国教徒との交際が詩人としての経歴にとって大きなマイナスになるという認識であったに違いない。この派を脱会することはパトロンの不興を買わないためにも必須のことであった。ヘルプストンの牧師であった C. Mossop は1820年3月のクレア宛の書簡の中で「Ladstock 卿の永続的庇護はクレアの振舞い次第であるから、クレアは注意深く監視されるであろう」という意味のことを言っている。³⁰ 農業労働者が詩人になるということにおいては、その低い身分がもたらす障害は現代のわれわれが想像する以上に過酷なものであった。その過酷さは、端的にいえば、読者層である上流階級の趣味や流行に合わせる事が創作のモチーフ・目的や詩人の思想・信条よりもはるかに重要であったということである。こうしてみるとクレアは国教会にたいしては表面上だけでも賛同せざるを得なかったであろうし、非国教会派にたいしては逆に誹謗せざるを得なかったことは容易に推察できる。もしそうであるならば、クレアが 'I reverence the church' と記したことは読者層や国教会の福音主義者³¹ であるパトロン達を刺激しないためのポーズであると受け取れよう。彼は国教会派の人々に面と向かって非難するような率直な行為は必ずしも前途ある詩人にとって賢明なことではなく、国教会をひとりで相手にすることを引き受けるような馬鹿な真似はしたくなかったのである。その意味では彼が福音主義者のパトロン達を受け入れる態度をどの程度単純化できたかはキーポイントであったろう。³²

'The Parish' をほぼ書き終えていた1824年4月にはクレアはランターの会衆となっていた。彼らの素朴さ、崇高な信仰心、たゆまぬ情熱といった長所に感動した。彼らの目的は社会を変えるのではなく人々の魂を救済することであり、指導者の Hugh Bourn は彼らがノン・ポリであるように教導したにもかかわらず、彼らは反対派から迫害された。彼らが迫害されたことにたいしてクレアが共感を抱いていたことも彼がランターの集会に参加する理由であったろう。同年4月20日付けの Hessay 宛の書簡にはこういう箇所がある。

I have joind the Ranters that is I have enlisted in their society they are a set of simple sincere & communing christians with more zeal than* knowledge earnest & happy in their devotions O that I could feel as they do but I cannot their affection for each other their earnest tho simple extempore prayers puts my dark unsettd consience to shame³³ (* than)

しかしその後まもなく、ランターと交わったけれども彼らのように信仰に熱中できないとわかると、彼は信仰への疑念と不信心に悩まされると同時に死の恐怖に襲われ、死後の世界について瞑想する。またウェスレー・メソジスト派との交わりは同年5月8日付けの Taylor 宛の書簡のなかで 'the sincere & enthusiastic manners of the methodists in devotion puts my glimmering consience to shame'³⁴ と言わせている。1824年はランターとウェスレー・メソジスト派との間で揺れ動いた、クレアの精神史における重大な年であった。この二派を含め、彼が経験したキリスト教徒一般について1824年4月3日付けの Taylor 宛の書簡で次のように述べている。

I agree with you that the religious hypocrite is the worst monster in human nature & some of these when they had grown so flagrant as to be discoverd behind the mask they had taken to shelter their wickedness led me at first to think lightly of religion & sure enough some of the lower classes of dissenters about us are very decietful & in fact dangerous characters especialy among the methodists with whom I have determind to assosiate but then there are a many sincere good ones to make up & why shoud the wicked deter us from taking care of ourselves when they ought to appear in our eyes as a warning to make us turn to the right way—my opinion Taylor of true Religion amounts to this³⁵

また同年9月26日付けの 'The Journal' では次のように書いている。

[I] came home & read a chapter or two in the New Testament I am convincd of its sacred design & that its writers were inspird by an almighty power to benefit the world by their writings that was growing deeper & deeper into unfruitful ignorance like bogs & mosses in neglected countrys for want of culture—but I am far from being convincd that the desidrd end is or will be attaind at present while cant & hypocrisy is blasphemously allowd to make a mask of religion & to pass as current characters I will not say that this is universal God forbid—³⁶

1824年を境に、1814年以来のこれら非国教徒との集中的あるいは断続的交際の後、最終的にかれらと断絶したことは彼自身の過去と彼の属する社会との断絶を象徴し、その後の詩に深大な影響を及ぼすことになる。

(5)

次に国教会に属する登場人物の描写を見ていきたい。以下は教区教会内部の人間模様である。教区の主要メンバーである教区委員、治安官、民生委員については、

Churchwardens Constables & Overseers
 Makes up the round of Commons & of Peers
 With learning just enough to sign a name
 & skill sufficient parish rates to frame
 & cunning deep enough the poor to cheat
 This learned body for debatings meet (1220-5)

と言われ、やはり無知と狡猾が彼らの特徴であり、彼らが貧民を欺くことに詩人は憤る。彼らは上・下院の議会よろしく議員団を構成し、署名ができる程度の学識と教区税を案出するのに必要なわずかな能力しかないが、貧民を詐取するための十分な狡猾は持ち合わせている。彼らの秘書である教会書記はこう描かれる。

Their secretary is the Parish Clerk
 Whom like a shepherds dog they keep to bark
 & gather rates & when the next are due
 To cry them oer at church time from his pew
 He as their 'Jack of all trades' steady shines
 Thro thick & thin to sanction their designs
 Who apes the part of King & Magistrate
 & acts grand segnior of this turkish state
 Who votes new laws to those already made
 & acts by force when one is disobeyd
 Having no credit which he fears to loose
 He does what ever dirty jobs they chuse (1230-41)

彼らは教会書記を牧羊犬のように飼っている。それは彼に教区税をどなりながら集めさせ、別の税の納期がくれば、そのことを彼の座席から叫ばせるためである。彼は彼らの堅実な「万屋」として秀で、万難を排して彼らの目論見を正当化する。彼は王や長官の役を猿真似し、トルコ帝国皇帝のように振舞う。既成の法よりも新しい法に賛成し、新法が遵守されないときは権力づくで従わせる。彼は失う心配をすべき信用は持っていないので彼らの望むどんな汚い仕事もする。次に「黒棍棒屋」に移ろう。当時行政単位でもあった教区の教会は役所・警察・裁判所の機能を兼務していたが、晒し台の監督者かつ手錠の管理者であった「黒棍棒屋」は警官・刑の執行人・教区税の徴税人の仕事もし、教区の権力者達のお先棒担ぎである。彼の晒し台や手錠といった商売道具は彼の威厳をひどく台無しにしている。というのは良識ある者は彼を見てあざ笑い、彼の商売道具ほど人の名前に光彩を与えた道具はないと彼に聞こえるように皮肉を言うからである。それはまた彼のひどい所行が「ずるがしこさ」で堅く護られてはいるが、しばしば隠し被せなくなるからである。彼の所行は密輸入者の取引のように月光を避け、暗闇に乗じてなされるのであるが、被いの裂け目からちらりとのぞけるし、時として突然に露見するからである。

Thus summons oft are served in hopes of pelf
 To overcharge & get a fee for self
 & village dances watched at midnight hours

In the mock errand of his ruleing powers
 With feigned pretence good order to preserve
 Only to break it if a chance should serve
 For married clowns his actions closely mark
 & jealous grow at whispers in the dark
 Whence broils ensue—then from the noisy fray
 Himself hath made sneaks unpercieved away
 Like to the fox whom yard dogs barks affright
 When on the point of robbing roosts at night
 Such is this Sancho of the magistrates
 & such are most knaves of those petty states (1252-65)

彼は金欲しさに呼び出し状を送り、自分の懐に入れるために余分の科料を請求する。また村の支配者達のいいつけだと偽って舞踏会があつている真夜中に家を一軒一軒見回るが、そのいいつけというのも治安を維持するというでっち上げたもっともらしい口実である。彼はチャンスがあれば自ら治安を破ろうとする。即人家に押し入り、窃盗を働こうとする。村の既婚の労働者の男達が彼の行動を細やかに監視し、暗闇の中のささやき声を聞いて警戒心を募らせる。その内の一人がまさに盗みをせんとする彼を見つけ、騒ぎが起る。つまり彼は舞踏会の真夜中、空き巣狙いを働くのである。「黒棍棒屋」において風刺の対象となっているものは 'pelf'・'self'・'mock'・'feigned' という語が示すように利己心とそれを実現するための虚偽である。彼にはもうひとつの見逃せない様相がある。それは彼が貧民を圧迫していることである。

Tasking the pauper [his] labours to stand
 Or clapping on his goods the Parish Brand
 Lest he should sell them for the want of bread
 On parish bounty rather pind then fed
 Or carrying the parish book from door to door
 Claiming fresh taxes from the needy poor
 & if ones hunger overcomes his hate
 & buys a loaf with what should pay the rate
 He instant sets his tyrant laws to work (1278-86)

貧民に重労働を課したり、彼らがパンを買うために家財道具を売却することを阻止するために、それらに教区の烙印をどんどん押しつけていく。また納税台帳を持って貧民の一軒一軒を回り、新たな税を課す。彼らが税を納めずパンを買おうものなら、「暴君の法」を発動させる。

「黒棍棒屋」と彼の主人の関係は「類は友を呼ぶ」というようなものである。「両者とも利己主義のためには大変汚れた足でさえなめる」(Both for self interest lick the foulest foot 1301) のであり、「まったくさもない行為であることや悪臭にもかかわらず／利得というパン屑をととも汚い下水だめから拾い上げる」(& spite of all the meanness & the stink / Picks up gains crumbles from the dirtiest sink 1302-3)。これらの詩行のイメージは彼らが 'self interest' のためにはどんな卑劣な行為も厭わないことを表しており、クレアの風刺の辛辣さはその極に達している。産業革命期を

通して英国国民の心を捕らえて放さなかった「利己主義」の隆盛とともに「真実」や「正義」を尊び、それらを実質あるものにしようと努める精神は衰微していった。そういう新しい社会にたいし次のように糾弾する。

& why should power or pride betray its trust
Is it too old a fashion to be just
Or does self interest inclinations bend (1334-6)

クレアの国教会派の人々へのラディカルな攻撃はこの三行に収斂されるであろう。即教区の支配者を構成する高ぶった権力者達は、彼らを信頼する被支配者である貧民の期待を何故裏切らねばならないのかと問い質す。権力者達にとって貧民にたいして公明正大であることは余りに古くさい、時代遅れの流行とでも思っているのかと問い質す。'just' という語は法的な意味においてのみならず、神の眼からみてその教えにたいして正しいのか、義にかなっているのかという宗教的な意味においても用いられている。あるいは利己主義者は己がもつ傾向、即利得追求への過度の欲望を克服しているのかと質している。言い換えれば利己主義者は自己中心的であり、他人の利益を顧慮しない傾向をもつが、この傾向を克服し、権力者として貧民にたいして同胞愛や共感を感じ、村落共同体における相互扶助の精神を発揮することによって、自らの責任を果たしているのかと糾弾している。

次に農業家 Finch を見てみよう。彼は「有徳の士」として傑出しており、「公的生活においてはまったく厳格で、正直かつ誠実であり」、キリスト教徒としても模範的な信徒である。牧師は自分の説教で Finch が聴かなかったものは一つもないと言って彼を誇りに思う。熱狂的な非国教徒さえ彼より善人にはなりえないと他の信徒の誰もが口を揃えて言う。これが彼のうわへの、教会という公の場での姿である。ところが彼の正体はこうなのである。

—In that same church & in that very pew
Where he each sabbath sings & reads & prays
He joins the vestry upon common days
Cheating the poor with leveys doubly laid
On their small means that wealth may be defrayed
To save his own & others his compeers
He wrongs the poor whom he has wrongd for years
Making the house of prayer the house of sin
& placing Satan as high priest within
Such is this good church going morral man
This man of morrals on deseptions plan
So knaves by cant steer free from sins complaints
& flatterys cunning coins them into saints (1387-99)

彼は教区総会のメンバーであり、貧民を騙して彼らに二重の課税をする条例を画策する。それは富者が納めるべき税を貧民に肩代りさせようという意図である。彼自身と彼の仲間達の納税による出費を節約するために貧民を虐待し続けようと言うのだ。Finch は真の「有徳の士」であるならば、貧民を精神的のみならず経済的物質的にも「救済する」(save) べきであるが、実態は逆で、貧民を「欺き」(cheat)、虐待するのである。クレアは「救済する」という教会の使命を Finch の所行を暴

露することで鋭く皮肉っている。クレアの cheat と save という語の使用法は国教会の有徳の信徒と教区総会の本性を言い得て妙である。Finch の正体の特徴を表す語は cheat・deception・cant である。彼は教会を「祈りの家」ではなく「罪の家」にし、Satan を大司祭にしている。彼のような連中は信心深さを装った言葉使いによって「罪の苦しみ」をうまく回避し、彼らを取り巻く賢い追従者達は彼らを篤信家に作り上げるというのである。

(6)

国教会内部と Finch が参加している教区総会についてさらに詳しく見ていこう。教会を表面上だけは神の家にし、実際は悪魔の家に行っていることによって神を冒瀆している教区総会のメンバーは、³⁷ 貧民には何の負債もないのに「貧民から身ぐるみはぎ取り、衰弱しすぎて抵抗できない困窮者からひどい命令でパンを強奪するために」(To fleece the poor & rob with vile command / Want of its bread too feeble to withstand 1354-5) 集まる。そういう目的をもつ「教区総会」(parish vestrys) を詩人はこう説明する。

For in these Vestrys cunning deep as night
Plans deeds that would be treason to the light
& tho so honest in its own disguise
T would be plain theft exposed to reasons eyes
For the whole set just as they please can plan
And what one says all sanction to a man
Self interest rules each vestry they may call
& what one sticks for is the gain of all
The set—thus knavery like contagion runs
& thus the fathers card becomes the sons
Both play one game to cheat us in the lump
& the sons turn up shows the fathers trump (1358-69)

貧民を虐げる教区総会の狡猾な者達のたくらみは 'deep as night' という表現で、その所行は 'deeds that would be treason to the light' という表現で形容されているように、暗闇のイメージである。彼らの狙いは夜の闇のように表面下深く、狡猾な手口のため非常に計り難い。彼らの所行は「光にたいする反逆であろう」というが、'the light' を「天上界の輝き」(the brightness of Heaven) あるいは「神の真理もしくは神の愛等によって魂を暗愚から光明の世界へと救済すること」(the illumination of the soul by divine truth or love, etc. OED 7.a) の意味にとるならば、それは暗愚から魂を啓蒙し、解放する宗教への反逆であると、また 'Applied to God as the source of divine light and to men who manifest it' (OED 7.c) の意味にとるならば、神の意志にたいする反逆であると解釈される。教区総会は「良識ある者」(common sense) や「理性ある者の眼」(reasons eye) からみればそのように映る。教区総会員のところを占めているのはやはり利己心であり、彼らがそれに固執するのは親族や仲間全員の利得のためである。教区総会はそのような者達の集合体であり、彼らは共謀して「われわれを騙し」、即労働者階級を欺き、収奪しようとするのである。

最後に利己心に捕らわれており、利得への執着から脱しきれない聖職者の描写を見てみよう。「恐

怖判事」(Justice Terror) は親族のひとりを牧師補に引き立て、豪邸に住まわせる。この牧師補の利己心は次のように攻撃される。

Whose love of gain makes up for want of grace
 Who wears his priesthood with a traders skill
 & makes religion learn to make her bill
 Who ere he cures his sheep of their disease
 Like lawyers studys oer the churches fees (1529-33)

彼の内面には美点が無い。その代わりに利得への愛着だけがある。「商人の手腕」を発揮することによって利己を計ることは「聖職」(priesthood) の本質を空洞化することである。³⁸ 教区民の苦悩を癒すよりは教区税を熟慮するほうが大切である。教会に入ってくる埋葬料・婚姻届出料といった諸手数料を独断で値上げしたり、余分にとったりする。一例を挙げると教区外の土地で死んだ者は教会墓地に埋葬される権利は失われ、残された生活必需品の没収手数料は二倍取られるという具合である。神の代理人としての牧師補の利己心のすさまじい有様をこう描く。

With him self interest has a face of brass
 A shameless tyrant that no claims surpass
 Who shrinks at nothing & woud not disdain
 To take a farthing in the ways of gain
 Or less what ere his claims & fees enjoin
 If such a fraction was a current coin
 Such is the substitute put on to keep
 The close shorn remnant of his worships sheep
 & bye & bye hopes at his friends decay
 To be sole shepherd & recieve full pay (1552-61)

破廉恥という点では、利己心にとらわれた牧師補の右にでる者がいない。彼は通貨なら一銭でも獲得することを厭わない。引用文中で注意すべき表現は 'the close shorn remnant of his worships sheep' であろう。これは「閣下の羊のなかで、毛を短く刈り取られ、生き残っている羊達」という意味であるが、教区の支配者によって諸権利や生活の手段を奪われていった下層労働者の教区民を指している。私欲に満ちた牧師補はこういった貧民を「飼う」べく任されているが、実際は彼らから金品を収奪しているのである。「羊飼い」である友人の体が衰弱すると彼は自分がただ一人の「羊飼い」になり、給与を独り占めしたいと思う。こういう実態を目の当たりにしていたクレアはここでもまた 'self interest' と宗教の関わりについて糺している。

& is religion grown so commonplace
 To place self interest foremost in the race
 & leave poor souls in Satans claws confind
 Crawling like crabs a careless pace behind (1562-5)

《宗教》は競走において「利己心」を第一に重要なものと考え、貧しい人々の魂を Satan にとらわれ

た状態のままに放置する。真っ先に駆ける「利己心」とは対照的に《宗教》の本来の姿である救済活動は蟹のようにノロノロとのんきな足どりで後方を這っている。神の代理人である聖職者は貧しい人々をなおざりにしているため、彼らの魂は罪に汚れたままの状態、信仰心も湧くことはない。これ程まで《宗教》はつまらないものになり下がっているのか、聖職者は何はさておき第一に貧民を物心両面において救済するのが勤めであるが、ことほどさようにその勤めを忘れ、‘self interest’にとらわれているのかと問い詰めている。‘careless’ という語は貧民にたいして不注意であるというコノテーションをもつ。クレアにはこの牧師補が反宗教的な悪魔にくみする者と思われた。

さて以上非国教会派と国教会の信徒や聖職者の特徴を詳細に見てきた。クレアは宗教が利己心に毒され、墮落する以前即宗教の実質がなくなり、教区の庶民を見捨て、例えば狩猟のような娯楽を聖職者が嗜み始める以前に生存していた一人の牧師を描いている。彼は庶民と同様質素な生活を送り、飢えた者が食べ物求めてくるかぎりはなにか一つ無駄にはしなかった。彼がパンをもっている間はそれを飢えた者達に分け与えた。非難攻撃された信徒や聖職者とは対照的である、クレアの理想的な聖職者像は次のごとくである。³⁹

His chiefest pleasure charity possest
 In having means to make another blest
 Little was his & little was required
 Coud he do that twas all the wealth desired
 Tho small the gift twas gave with greatest will
 & blessings oer it made it greater still
 On wants sad tale he never closed his door
 He gave them somthing & he wishd it more
 To all alike compassions hand was dealt
 & every gift tho small was deeply felt (1614-23)

慈善に満ちた彼は貧民を援助し、少しでも幸せにする資産をもつことに最大の喜びを見いだす。自分のために所有するもの、自分のために要求するものはほとんど無い。困窮する人々に施す量だけが彼の欲求のすべてである。施す物の多いことを望む。彼の「共感からなされる援助」は求める者皆に等しくなされる。‘compassions hand’ は重要な意義をもつ。この牧師が貧苦にあえぐ人々の気持ちになることができたということを表す compassion は聖職者には欠くべからざる人間的な能力である。この能力があってはじめて彼は施しをすることによって利他の精神を発揮できた。施しを受けた者から感謝の言葉を返してもらうだけで彼は満足する。そのことを簡潔に表している詩行は「もしその行為の価値が認められたのなら、当然のごとくその行為は報いられた」(& ownd was worth rewarded as it ought 1626) である。⁴⁰ クレアは「回顧的理想主義者」(a retrospective idealist) であると言われるように、⁴¹ 彼はそう遠くない過去にこの ‘old good vicar’ を指定し、その美德を強調している。そしてこの強調は、「宗教は今や篤信家ぶった言葉使いにすぎない／信仰深さを装った者に欠けているものを隠すマントである」(Religion now is little more then* cant / A cloak to hide what godliness may want 455-6 * than) という表現が示すように、このような美德が当時村落共同体の中で急激に消滅しつつあったことを意味する。この理想化された牧師にみられる利他主義の実践こそ、この詩全体に漲る批判精神の根拠となっている。

ところで ‘self interest’ を信奉する教区の中産階級の信徒達の形骸化した信仰と宗教上の一般的な

態度については次のような一節がある。

They love mild sermons with few threats perplexd
 & deem it sinful to forget the text
 Then turn to business ere they leave the church
 & linger oft to comment in the porch
 Of fresh rates wanted from the needy poor
 & list of taxes naild upon the door
 Little religion in each bosom dwells
 & that sleeps sound till sundays chiming bells (473-80)

彼らは穏やかな説教を大歓迎し、キリスト教徒としての不信心を突いた厳しい説教の脅しの言葉にまごつかされることはほとんどない。聖書の語句を忘れることを罪深いことだと思い、不信心を罪深いことだとは思わない。彼らの宗教にたいする心構えの有様をよく示している一文は、「彼らの心は教会を出るまえに商売のことに向いている」である。この一行は産業革命期における中産階級の一般的精神構造を表出しており、すぐれて印象的である。'business' は他人への共感を志向する宗教とは相反する、他人との競争の原理を内包している。それ故彼らは貧民が求める新たな救貧税の一覧表を見てはこれを酷評する。自己の利益を実現するためには、同胞の苦境を無視する彼らの心の中には共感はない。つまり慣習上形式的に教会に通うが、彼らにはほとんど宗教心はないと詩人は見た。⁴² 'business' という語が産業革命期における中産階級の信徒達の最大の関心事を表すばかりではなく、教会自体にも内在し、宗教を墮落させている聖職者達の最大の関心事でもあったことを暴露する一節を見てみたい。

Wolves may devour oppressions fiends may reign
 Nones nigh to listen when the poor complain
 Too high religion looks her flocks to watch
 Or stoop from pride to dwell in cots of thatch
 Scenes too important constant business brings
 That lends no time to look on humbler things
 Too much of pleasure in her mansion dwells
 To hear the troubles which the pauper tells
 To turn a look on sorrows thorny ways
 Like good samaritans of former days
 To heal in mercy when foul wrongs pursue
 & weep oer anguish as she once woud do (1698-709)

産業革命に連動した農業革命において「偽物の改革の計画が荒れ地を囲い込んだ」(mockd improvments plans enclosed the moor 1692) 状況のなかで、貪欲な権力者達は貧民を圧迫するが、貧民の苦情に耳をかす者は誰もいない。「宗教」も高遠すぎて教区の庶民の世話をしないし、自らの高ぶりもあって農業労働者の小屋で栄えることはない。商売あるいは事業が絶えずあまりに重要な場面を引き起こすので「つまらない事柄」(humbler things) をながめる暇など「宗教」にはないと言う。「宗教」の属性である 'high' とは対照的な 'humble' という形容詞は地位・境遇が低く、卑し

いことを含蓄している。クレアにとって、「約束の地へと旅する巡礼者達のための荒野における標」となり、現世の圧迫・支配に押し潰されないよう弱者を励まし、「疲れたる者を休め、貧者を解放する」(to rest the weary & relieve the poor 1725) ことが教会の使命であり、存在理由である。教会が保護者であった良き時代の宗教は「多くの苦難を受けるべく生まれた貧しい、孤独な社会の除け者」(those poor lorn outcasts born to many cares 1756) への共感を主張したが、その宗教が今では self-interest と business によって空洞化されている様相をクレアは次のようにとらえている。

Religions humble plea was felt in vain
 When ruin entered with the hopes of gain
 Its weak defence was trampled under foot
 & all its pride laid level to its root (1735-9)

この現象は、self-interest を実現するために「囲い込み」を目論見、遂行した時代のエートスが自然の破壊と同時に人間精神における破壊をも現出させ始めたときのものである。「宗教」は self-interest にたいして自分を墮落させ、空洞化しないようにと「控え目な懇願」をするけれどもその意は汲まれることはない。「宗教」の弱い防御は踏みにじられ、困窮する人々の救済という「宗教」の「誇り」も地に落ちる。ここでも 'humble' という語は 'lowly condition, rank, or estate' (OED 2) を含意し、「樹樹や雑草の無い教会の境内は昔とは大いに異なる情景を見せている／教会が保護者であった時代をよく知る人々にとっては」(Far different scenes its (churchyard's) nakedness displays / To those familiar with its guardians days 1732-3) における 'nakedness' と共に 'ruin'、'trampled underfoot' 及び 'laid level to its root' は樹木・茂み・泉を取り払い、荒地地を平らな耕作地に変え、共有地を私有地に変えた「囲い込み」を暗示する。「囲い込み」による自然界の破壊は詩人が目の当たりにした光景であった。「囲い込み」に象徴される農業革命を推進した権力者達は経済的変革と不可分の関係にある政治的変革の唱道者であり、「自由」を標榜した。この詩における政治的な側面については稿を改めたい。

(7)

これまで非国教徒、国教徒、教区総会、理想的牧師像、宗教の墮落現象についての詩行を検討してきた。非国教徒を風刺しているのは、1824年まで彼らと断続的に親しく交わっていた事実を隠すことによつてか、もしくは歪曲することによつて詩人としての立場を良くし、将来性を損なわないようにという意図からではない。というのは非国教徒に劣らず、辛辣かつ徹底的に国教会も風刺しているからである。双方に属する人々を一体とみなし、「真の地域社会精神と相互扶助」(true community spirit and mutual aid)⁴³ という基準からみて、社会の黄金時代からの墮落としての宗教界全般を風刺していると考えべきである。クレアは宗教そのものについてどのように考えていたのか。もう少し明確な形でその考えを示している個所を見てみよう。

Religions aim is truth & different creeds
 By different channels for that aim proceeds
 But many wander muddy by the way
 & dark with errors struggle far astray

Till weary with the toil they fainter creep
 & then like stagnant waters stink & sleep
 Religions truth a plain straight journey makes
 Which falshoods wandering never overtakes
 . . .
 Tis not religion but its want when sects
 Rail each at each to hide their own defects
 For calmness quiet cheerfulness & love
 Its essence is to aid our hopes above
 Tis vain philosophy that would decieve
 The[y] heer too much to doubt or to believe
 What is & was we feel—what is to be
 Truth nothing knows tis guess pretends to see
 Een earths least mysterys are above our skill
 & would-be-gods are but her childern still (549-70)

宗教の目的は真理であるという。信者はそれぞれ異なる様々な信条をもち、異なる様々な道程をたどってその同じ目的に向かって進む。しかし途中で多くの者が欲望から生じる誘惑に負け、信仰の道を踏み迷い、道端で憂鬱な顔をしている。そして誘惑に負け、過ちを犯しているため暗い表情をして良心の呵責に苦しみながら立ち直ろうとするけれども、そのつらい努力に疲れ、信仰心は薄らぎ、ついには「淀んだ、掃き溜めの水のように悪臭を放つ」罪深い生活に浸るといふ。宗教の目指す真理は信仰心をもって徹底的にまっすぐに進まなければ到達できない。信仰心をもったふりをする偽の信徒は煩惱に負け、横道にそれるので、ひたむきに精進する者に追いつくことはけっしてできないのである。また諸宗派の信徒達が自分達の短所を隠すために互いに罵りあう状態は宗教心の現れではなく、宗教心の欠如の現れであるという。「心の静謐・穏やかな明るさ・愛」の修得を實現する希望を助成することが宗教のエッセンスであるというのがその理由である。宗教はまた人の心を惑わすかもしれない空しい原理であるという。'vain' という語は、人間にとって上述した希求されるものを修得することがこの上なく困難であることを意味している。人々はあまりに沢山の説教を聴くために何れを疑い、何れを信じてよいのか判断できない。人間は現存するもの、過去に存在したものを感じるだけである。真理を知っている者は誰もいなく、それがわかっているようなふりをする者がいても、その者はただ憶測しているだけである。この世の最も些細な現象でさえ人間の理解力の及ばないものである。自らを神に似て絶対的能力をもつ存在であると勝手に思い込んでいるような人間もやはり「自然の子ら」にすぎないという。引用文中の 'truth'・'creeds'・'love'・'philosophy' といった語は宗教についての次のようなクレアの文章を想起させる。

A religion that teaches us to act justly to speak truth & love mercy ought to be held sacred in every country—& what ever the differences of creeds may be in lighter matters they ought to be overlookd & the principle respected⁴⁴

義にかなって振舞うこと、真実を語ること、愛や慈悲の心をもつことを教える宗教はあらゆる国で神聖なものと考えられるべきである。比較的取るに足らない事柄においては、各宗派の信条の差異

がどういふものであろうと、その差異は大目にみられなくてはならないし、それらの宗教的信念・主義こそ尊重されねばならないという。

‘The Parish’の宗教的な側面をこのように読んできたが、詩人の風刺の立脚点は「風刺の詩神があずき色の服を着るとき／シラミが獲物のように飛び跳ね逃げるけれど詩神は追いつき捕まえる」(When satires muse puts on a russet gown / Tho vermin start as game she runs them down 421-2) というように常に庶民のひとりである。‘russet’は近隣の貧しい庶民が着る服の色である russet brown を暗示しており、詩神が庶民の見地から風刺していることを示している。⁴⁵ 詩の読者層のほとんどが国教会に属する中・上流階級であってみれば、また詩文学とは縁のうすい農業労働者の出身である詩人に伴う微妙な立場や創作活動への制約を意識していたのであれば、彼らに対するクレアの風刺の矛先が鈍くなってもやむを得ないところであるが、実際は「無理に読者に気に入られようとするあのような偽善的な書き方なんかそっくらえ」(Damn that canting way of being forced to please)⁴⁶ と吐いた気概がこの詩にはうかがわれる。このような気概で書かれたこの詩の風刺精神を支えていた最大の信念は何であつたらうか。次の引用は現実認識から形成された、そういう信念を表出していると考えられる。高慢な者がこの世でいくら貴頭を誇っても、それははかないものである。それは「死」が驕慢な者の鼻柱を折るからであるということのを忘れるなど戒める。そして次のようなことを肝に銘じるようにという。

That hand that formd thee & lent pride its day
 Took equal means to fashion humbler clay
 One power alike reigns as thy god & theirs
 Who deaf to pride will listen humbler prayers
 He as our father with the world began
 & fashiond man in brotherhood with man
 & learn thou this proud man tis natures creed
 Or be thou humbled if thou wilt not heed
 The kindred bond which our first father gave
 Proves man thy brother still & not thy slave (1982-91)

創造者は神として高位の者も身分卑しい者も平等に造り、平等に取り扱う。この一神は「驕慢な者の言うことは聞かないが、控え目な者の祈りは聞き入れる」という。無論‘humbler prayers’は「身分卑しい者の祈り」とも受け取れる。神が天地創造のとき「人間を人間の同胞として形造った」ことは「自然界の教義」であること、神が与えた「人間の同等の絆」が人間は人間の奴隷ではなく同胞であることを証明していることを忘れてはならないと論じている。こうした平等主義の確信こそが、産業革命期に蔓延していた過熱した self-interest と、その結果人間を石炭や水と同じ様な労働力、即生産するためのエネルギーの一部としてしか見なさなかつた社会の墮落、とくに宗教の墮落を憤り、攻撃したクレアの風刺精神を可能たらしめたものである。その憤りの激しさはクレアに‘Satire should not wax civil oer its toil / Tho sweet self interest blossoms on the soil’ (75-6) という、この詩の創作上の基本的な心構えを書かせている。‘The Parish’を‘a vitriolic and energetic satire on the corruptions and pretentions of village society’⁴⁷ にしているのは、彼の詩についての信念と社会にたいする憤怒である。風刺の対象である cant・hypocrisy・deceit・pretention等の vice に対して honest・truth・reason・common sense等の virtue を対置させたこの詩は産業革命と「囲い込み」

という形態で推進された農業革命がもたらした村落共同体における人間の精神の変化についての政治的かつ道徳的批判の詩と言える。Thornton はいみじくもこの詩が 'a fiery moral poem'⁴⁸ であると結論した。そしてこの詩で活写された登場人物の生き様は確かにクレアが体験したヘルプストーンという村落共同体における事実から成る原風景に根ざしてはいるけれども、その時代と場所に限定されることはなく、時間と空間を越えて今日でもわれわれの身近で見受けられる人間一般についての批判として提示されていると言っても過言ではない。このことは A. Pollard のことばを借りれば、'The Parish' における風刺の「基本的態度が一時的なものを超越し、永続的意義を持っている」⁴⁹ ということである。あるクレア研究者は 'The Parish' が「貧困の諸原因を綿密に調べた1820年代のほとんど唯一の詩」⁵⁰ であると評している。だが、この詩は決して事実の記述とその羅列に終始するような歴史的ドキュメントなどではなく、想像力の産物であることは改めて言うまでもない。⁵¹ クレアの詩はそのラディカルな政治思想と批判精神ゆえに今世紀の半ばまで major poet の作品として本格的に取り扱われ、研究されることは少なかった。だがクレアの詩は、「人類の触角」としての詩人が当時の英国社会の実状について抱いた危機感に溢れている。現代人を取り巻く状況には、'The Parish' において風刺の対象として描出された物質と人間精神の關係に酷似したものがある。そして今日われわれはクレアが抱いた危機感を共有できるようになった。それ故この危機感の重要性を理解しながら、彼の洞察力に満ちた詩が再検討されねばならない。ようやく彼の詩の真価が認められ、major poet として彼の全貌が明らかにされつつある現在にいたってもなお彼の詩の原稿のすべてが権威あるテキストとして日の目を見ているわけではない。こういった点、詩に関するクレアの観念、'The Parish' における社会・政治に対する憤怒と痛烈な風刺等についてある慧眼の批評家は次のように洞察力と示唆に富むコメントをしている。このコメントは傾聴に値するのではあるまいか。

The ferocity of Clare's poetic conviction and social resentment has too often been assimilated as pathos or pathologised as madness. It has been difficult for this deep note of political anger—an anger provoked by, among other things, the difficulties he experienced in getting a hearing within his lifetime—to get a hearing after his death. We need to hear the hard ironic edge of Clare's voice in *The Parish* (where 'satires muse puts on a russet gown') as well as the throatily celebrant voice of *The Shepherd's Calendar*. The subsequent history of the poet's own 'Remains' confirms the truth of his suspicions. It is a bitter irony that 'posterity' has had until recently only limited access to those 'Works'.⁵²

注

- 1 John Barrell, *The Idea of Landscape and the Sense of Place 1730–1840: An Approach to the Poetry of John Clare* (Cambridge U. P., 1972), p. 231.
- 2 See Mark Miner, 'John Clare and the Methodists: A Reconsideration', *Studies in Romanticism* Volume 19, Number 1 (Boston University, 1980), p. 38.
- 3 Mark Storey ed., *The Letters of John Clare* (Oxford U. P., 1985), p. 250.
- 4 *Ibid.*, p. 254.
- 5 *Ibid.*, p. 377.
- 6 Kelsey Thornton, 'The Nature of *The Parish*', *The John Clare Society Journal* (Number 5, 1986), p. 33.
- 7 Eric Robinson ed., *The Parish A Satire* (Penguin, 1986), p. 22.

- 8 Thornton, p. 33.
- 9 John Lucas, 'Clare's Politics', *John Clare In Context* ed. by Hugh Haughton, Adam Phillips and Geoffrey Summerfield (Cambridge U. P., 1994), p. 151.
- 10 テキストは Eric Robinson and David Powell eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822 Volume II* (Oxford U. P., 1989) を使用した。'The Parish' からの引用はすべてこの版に拠る。引用文の末尾に付した () 内のアラビア数字は行数を示す。
- 11 Eleine Feinstein ed., *John Clare: Selected Poems* (University Tutorial Press, 1968), p. 138.
- 12 Robinson, p. 11.
- 13 Thornton は 'The Parish' におけるクレアの道徳的激怒と cant の関係について次のように考察している。
Clare's sense of moral outrage is levelled not at politics and economics, or enclosure, though they define some of the expressions of oppression, nor does it seem to be levelled specifically against the gap between farmer and labourer, though that is part of its expression, but at cant. (p. 33)
- 14 Miner, p. 40.
- 15 Robinson, p. 14.
- 16 *The Letters of John Clare*, p. 500.
- 17 James Mckusick, 'Beyond the Visionary Company: John Clare's resistance to Romanticism', *John Clare In Context*, pp. 225-6.
- 18 Feinstein, p. 9.
- 19 Feinstein は 'Eve ... had lovd an adam' という部分を 'This is ambiguous, but it suggests that the girl was already married before she began her love affair with Ralph.' と解釈している。See Feinstein, p. 140.
- 20 Eric Robinson ed., *John Clare's Autobiographical Writings* (Oxford U. P., 1983), pp. 25-6. (以下 JCAW と略記する)
- 21 Robinson, p. 21.
- 22 JCAW, p. 33.
- 23 Robinson, p. 18.
- 24 JCAW, p. 65.
- 25 Miner, p. 33.
- 26 JCAW, p. 128.
- 27 See Miner, pp. 34-5.
- 28 See Miner, p. 34.
- 29 Miner, p. 37.
- 30 Miner, p. 36.
- 31 英国国教会は非国教徒の貧民救済活動に対抗して、貧民を国教会内に保持しておくために1797年福音主義派の Society for Bettering the condition of the Poor を形成した。See Miner, p. 33.
- 32 See Robinson, p. 22.
- 33 *The Letters of John Clare*, p. 294.
- 34 Ibid., p. 296.
- 35 Ibid., p. 292.
- 36 Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Oxford U. P., 1983), p. 182.
- 37 国教会の内部とくに教区総会の宗教上の偽善と瀆神についてクレアは次のように酷評している。
Within the church where they on sabbath days
Mock god with all the outward show of praise
Making his house a pharisees at best
Gods for one day & Satans all the rest (1346-9)
- 38 18世紀後半における国教会の状態についての次の記述は、クレアが経験した19世紀初頭にもあてはまるであろう。
「教会はどうであろう。聖職議会は事実上機能を停止しており、また主教たちは地位と富と社交を追求するに忙し

かった。他方、合理主義の普及もさることながら、正統的キリスト教も道徳的体系以上のものではなく、説教の多くは道徳的実践の論述とかわりはなかった。大衆にたいする教会の救霊教化の事業は、忘れ去られたかのようであった」(小笠原政敏、『教会史・下』、日本基督教団出版局、1977、pp.65-6)

- 39 Arthur Pollard は、現実と理想についての風刺家の意識と社会の関係を次のように述べている。「諷刺は常に現にあるものとあるべきはずのものとの違いを鋭く意識している。…彼(諷刺家)が社会で成功を収めるためには、表面的であれ、社会が彼の掲げる理想に同調しなければならない。社会が口先きだけでも、諷刺家の理想に同調するならば、彼は単に悪徳の摘発者にとどまることなく、もっと巧妙かつ有効にその力を発揮できる立場に置かれる。すなわち、そうしたときにこそ諷刺家は外観と内実の矛盾をうまく利用し、とりわけ偽善を暴露することができる」(アーサー・ポラード、『諷刺』、鈴木善三訳、研究社、昭和47年、p.4)
- 40 Feinstein は 'ownd was worth' を 'if worth were recognised' とパラフレーズしている。See Feinstein, p.141.
- 41 Miner, p.38.
- 42 「…時代の進展、ことに十八世紀から十九世紀にかけての、農業革命から産業革命に至る激変は、信徒たちの関心を教会から社会生活・経済生活へと転換させたこともあって、革新の気分とは縁遠く、その弊害は募るばかりであった。もちろん、聖職者たちは既存の体制の変化を好まず、いわば檀家の上にあぐらをかいて、太平と貪欲をほしいままにしていたといつてよい。十九世紀の初頭、国教会は崩壊するという声が聞かれるほどであったという」(小嶋 潤、『イギリス教会史』、刀水書房、1988、pp.198-9 参照)
- 43 Robinson, p.15.
- 44 Ibid., p.18.
- 45 See John Lucas, *Writers and Their Work: John Clare* (Northcote House, 1994), pp.44-5.
- 46 Ibid., p.14.
- 47 H. Houghton and A. Phillips, 'Introduction: relocating John Clare', *John Clare in Context*, p.4.
- 48 Thornton, p.35.
- 49 ポラード、p.117.
- 50 Johanne Clare, *John Clare and the Bounds of Circumstance* (MacGill-Queen's U. P., 1987), p.35.
- 51 'The Parish' の創作とクレアの想像力について、*A Real World and Doubting Mind: A Critical Study of John Clare* (Hull U. P., 1985) の中で Tim Chilcott は次のように考察している。
But it is precisely in the fact of an emergent constructing self that the larger significance of both 'The Mores' and *The Parish* lies. (p.79)
- 52 H. Houghton and A. Phillips, pp.17-8.

Clare and the Religion in 'The Parish'

Ren-ichi SUZUKI

Abstract

In 'The Parish' Clare criticizes the Dissenters, especially the Primitive Methodists, who had such religious enthusiasm as 'begins in extravagance' and 'degenerates into cant & hides at last into hypocrisy.' As for the Anglicans, Clare says that the parish vestries wronged the poor people, motivated by self-interest which partly promoted the Industrial Revolution and

the Agricultural Revolution. Both the Dissenters and the Anglicans had cant, hypocrisy, deceit, and pretention as their vices. Clare attacks the religious corruptions by means of virtues such as truth, reason, and common sense. Clare's satirical viewpoint is that of the common people, as it is suggested in the words: 'satires muse puts on a russet gown.' It is his egalitarian belief that God 'fashiond man in brotherhood with man' that made Clare write 'The Parish' as a poem of social criticism under hard conditions.